

謝 辞

重森 臣広

この退任記念論文集には、政策科学部在任中にお世話になった先生方や研究指導科目で私の拙い指導に我慢強く耐えてくれたかつての学生たちが寄稿してくれました。そのうえ多忙な中、田林葉教授、城戸英樹教授、堀池航洋君には編集の労をとっていただきました。加えて、リサーチオフィスの皆さんには、記念号の企画から発刊にわたる諸事を取り計らっていただきました。ここにあらためて感謝申し上げます。

最初に大学教員になったのは1991年、つまり大学設置基準大綱化の年にあたります。当時、話題になっていたのは大学教養教育の教育課程であり教員組織でした。この流れを受けて、その後、続々と教養部の改組解体が進められることとなりますが、私は新米教員として赴任したとたんに、所属組織が解体されるかもしれないという刺激的な環境に身を置くことになりました。幸いなことに、改組解体前の1994年、ご縁があって新設の政策科学部に採用され今に至ります。

新設学部というものなかなか刺激的な環境であったことを記憶しています。なにしろ、全学年が揃うまで4年かかるわけで、クラスの運営、ゼミの選択から学生自治会の規約づくり、就職活動にいたるまで、教員のサポートが必要でした。一期生には「先輩」がいないので、私たち教員がある意味で「先輩」代わりになる必要もあったように思います。たいへんな思い出でしたが、今となってはよい思い出です。

やがて完成年度を迎え、卒業生も輩出し、大学院研究科も設置されて政策科学部は成長の途につくことになりました。あれから29年、人間でいえば青年期を過ぎていよいよ一人前というところさしかかり、独り立ちするときに迎えたということでしょうか。なんとなく大きく成長した子を見る親のような気分です。

いま定年退職を迎えるにあたって、こうして落ち着いた気持ちでいられるのも、教員・職員の方々が常によき同僚として接してくれたこと、そして演習でも講義でも、学部でも大学院でも、よき学生に恵まれたことのおかげだと感じています。授業のコマ数が異様に増えたり、会議の数がとんでもないことになったりして多忙になった時期はありますが、ほとんどストレスなく奉職できたこともそのおかげだと思っています。幸い大きな病気、大きな怪我をすることもなくこの日を迎えることができ、皆様に重ね重ね感謝申し上げます。

2024（令和5）年2月6日

